

1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2

1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2

1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2

1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2

1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2

中村俊定文庫

文庫 18

1006

2

二島の傳

古今集 セケの祕傳

三島 三木の傳





古今集七箇の秘傳



秘傳 紫雲神

佐古 大津作

王國 ひき大津作

玉津嶋大津作

世間のうれいしよ 佐古 大津島人
彼はそぞれに二條をもとへて
ちりばめたり おひこす 宮相伊賀の御のちの
玉津嶋大津作

吳中華集

之多
之少

卷之三

卷之二

卷之三

の死を悲しむに終り
す。さうしておれと

蒙古の被の下に思ひ掌て
詠うる山夷も少く人を地所
あらわすはまち也。之をも男の達に也
女、瑞氣わざる之是列五色之紀。費之深く
かくしのくはる人。志はくとく
口傳夜山にす。山夷妙事の如木

只傳曰　以爲之以延喜帝と詔へは其事
を志ハ古今集を拂リト奉　達喜　万葉集
を拂シテもモテトノハ心中をもれず其御も
故之古書の所　是之に恋ゆる所也　其の
日月の夕々もそうゆきつゝしやまくまく
ちゆるるによるる】と　うづかの脇のまゝ
をあらわしゆ　帝も草之を思ひき
又を遣とす　いふも十石の帝侍
ゆゑ之うかきハ作て天をもくめく御きとも
天照白雲と御宮とちゆくの根のちと天原
のゆゆゑあつてなにちよえ四天王を仰びま
又萬葉ハ春日の御事　萬葉集之本い主まい
御言々アレハ思ひゆく　さへハ此と心も
幸也　アラキマニイシテハ此と心も
ハチノ樹モモハクノ一是帝の御歎ハ唐大和の
二年　の事と以て建たハ主教古ハ白虎
恭ハ朱雀後ハ主武四神　御在の山中

古今圖書集成

石をもとめし
あらわれてもえりへうひ
ゆき一きぬあまくは
ひそ中まよはゆるはのく端まと
さくがはとてせよのくとまくはすいと
る物陽まよはてある物めぐにんもすとは
てこゆひ山にうれて多のまよとびてか
まづみ
但し是をとくは渡れ思

百十人ハシナヒ九郎クニヤ敵上人アキ
左にシタマツテ主シテ之シテは我國ワタリ
多馬タマのノ子コ也ハ多馬タマ也ハ
多馬タマ也ハ古今集コトハシラフ時トキ而
く集シラフ中ミ身カラ之シテ中ミり
中ミ多馬タマに海シマ立タケル之シテ公ヒロ
而シテ多馬タマ千馬チマ也ハ鷦セキ也ハ
まちマチにとシ人ヒト也ハ之シテ公ヒロ
往シマム之シテ古今集コトハシラフ而シテ收シテ

ぬ事ハシナヒあり多馬タマ也ハ身カラ之シテ四ヨリ古
一海シマ之シテ之シテ行ハシマリ松マツ原ハラのノ處シテ也ハ
之シテ之シテ之シテ也ハ之シテ也ハ之シテ也ハ

思シテ也ハ

稻イ有ウ鳥

ウ門ムカシ移シ有ウ鳥トリのノ夕ハシマ

夕ハシマ有ウ鳥トリ也ハ移シ有ウ鳥トリ也ハ

此ハシマ有ウ鳥トリ也ハ移シ有ウ鳥トリ也ハ

秋之日われ朝日　立の木に鳥はす
支生農子鳥の四民のとよとも食あをぬせ
紳士一毛ハ農ハ本人の如き移を芦出へて
よとも毛ひまく也故にモ叶をたかても百民
主耕一萬粒秋板是農の之せされ
王に侍うるま道高く忠孝うだらく
了せんに毛くかむり馬に毛くすにかくは
に移美ノニ詠より式ハ鷹鶻鶴ねの

後漢書の事人毛い馬とす事
口傳曰移有毛とよもは少集毛板
てすくは山山はウツ門とよも毛くがつに人
家集之稻有毛とよも費えう人てに達ひふと
今に聞合毛とよも毛くはよくとよも毛
は草と移毛とよも毛くは毛くまく毛
ハ移ハ五穀の毛とよも人の食あを移の毛
るの有くつて必ず移くは毛くは毛くまく毛
毛く毛く毛く毛く毛く毛く毛く毛く毛く毛

不い處ハ四事にて括リテも多至の事
其の一人ノリハ筆氣もて當て括リム也今朝
ハ此集出立之際ノ如ニ屬フ如クモ候
トキトキハ其の筆氣もとあくアキナリと後
人ノ筆もあくシヒトコロムトテ又ト極セリ

古事記ノ傳承記ノ如クモサクレハ云々と
古今集に於クモハ其之ニウキトマ人モ
其ノ事ノ如クモハ其之ニウキトマ人モ

之等奇の精神もアリケン一誠智行尊
の徳天地人神極ムトクノは此古今集の

回向文の三箇

御覧の本

善き事の如クモは既より有りゆ
何事かの如クモ本ゆと有りゆ
山川草木の如クモノは是より取まざれ
セ夜の如クモの如クモノ事一もあき松

長四字ハ四方を取リテ四方に四神を取
リ古黒石に深色をも黄の色化をもト
玉のまゝに裏には國の事と申す所と
有リ則多事の本は玉と云ふ事と有リ
天地人の事とが併てけんめくの事
是ゆ故て天下の事仕事事と申す事
固は其れ天の圓満地の事

四角

是事中ニヤロ一也斯事は口一也至事也
ヤモシニキモ之と同ニ是稱圓事仕之國事

ニ事とちて是事の事事
柳の陽の事も天より守の陽らも用事
其角にて用事

相生一句内に核あり陽へ走るハ万物の
了て天より乾す陽之走る事事也
始出事事不外乎天の枝を用ひ是別
理事事天より走る事事也是玉の事
事

さて三事の心を以て方野とす皆節とす事事

主君をもとめはるゆりひを野じとも
はゆふ背ふとて桂陽ま帰つしむほのち
よかく風す法のめぐれふのあわとぞう
とすすを経ます

妻戸花

花のあすあきあとも咲き

うけあのこ生す咲く

ひ事ト花とすいあむき印伝時法序歟
のれの事戸小やま刻、もとてさむるを例之

北斎

唐々りもむかふまほもませぬまえ
まぬかちのそほく人の性理とくにゆく

もとよもよもとくに傳てちよひゆ仕はせお妻元
に妻元とくにゆれひゆやくくわゆがくきにす
て妻元の利とて妻元とくにゆく是れ妻元
の利、花もとくに妻元とくに妻元とくに妻元
とくに妻元とくに妻元の花とくに妻元

ぬうめうらは花のあにあくまくうもせ
きよひむくと花とは花うみに春をうに
まうれい花のあよあくねくとうるすれも
やうくとくとくとくとくとくとくとくとく
おれ自らはまくまのうのれりとは花のあにあ
ねくわゆくせんうにあうに構ねのくとくとく
聖の蒙もくとくとくとくとくとくとくとくとく
ウ佐とせんじんとて二條の后へ税のゆくとくとく
もくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

河名抄

もくとくの名とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

蓮の裏は佛の心をもて旅泥も先も酒
に酔ぬる事無く酒も水もまろ
まろ多きよしもがゆやうすぢきひれ舟
とて舟は酒をよきよこ

相手の事もまじめの事とぞされさせよこ
ちゆうじもていふ。」とてよもよく天地
の事に人の事もまじめの事とぞせよ事な
こと九卿百官ますりつて一臣そくも
まこと主従ノ形ハ所不居みじき

主君の心ハとくにし御代は萬國も
一革改道も行ひれども其をかう
の國で將れはしききの事に行つは壁
もあらうつもあらう少くもあらう
ト持すとはあらうと清かすと清か
うの事もあらうと

古ニテ茶の物のふは土地人のことよもゆ
き生む事無く天のほすりつゆ佐ハ人にはり

佐々と前田は小坂の神社より車を走
人の多く付し御て御松車を

都馬の年

久保の河口にさす向ふに都馬
あらすじ人ひあらすじと
山野のまよの玉奈の都馬のすゝく便路
ゆきよも出る陽田川一ノ宮川とよ

川上あらすじめれこまにまともとせ
されと母御くまくまくへ陽田川の都馬にまそ
（御）都馬の都馬車にまくまくねるまとい
まとい（船）舟を敵上の波せすおと
と初冠とくくみくまくまくまく
あらすじ難別ちうまくまくまくまく
仁略ちうの底とくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまく
（船）舟を（舟）舟を（舟）舟を

陽城代と申す。そりやれどは仁明天皇の

後嗣の少勵まじ氣に於て東の事つり

ゆえに御子院と申す。之も陽城代と連

絡むる事無く、

よのじゆうの御子院と申す。も又ハ

ハ白龍の御子院と申す。紅葉の橋古唇の御子院と申す。

ト之を申す。是ち今御堂の事也。

御室御宿の御居候方、御子の四

子す。御子院と申す。之は御室御宿の事也。

人主御子院と申す。事も御子院と申す。

もあり又人主御子院と申す。事も御子院

の事也。思ひも御子院と申す。事も御子

院と申す。事も御子院と申す。事も御子

院と申す。事も御子院と申す。事も御子

院と申す。事も御子院と申す。事も御子

柳
隱
士
人
也
13

山海經

是の後は將以て松と

の事

小野 小町の傳

主徳之祥 一 論著者
云承日良實う娘 二 田國 良陽の娘も之
又己送の小野 三 そよぎは江注ちゆふ
もあたよてさせ。娘 とすらもあつて書ひ
ゆきのよしよしれども小野の小町とは云ひ

高木のやくやまをかうや先づあさきの
後をすまめあたるも而叶前、はのす
ひとくへ迎えにも尋ねてしに傳聞殊
に一後事の心もくわづもゆく
水下黄門光國卿の詮源改院正
おまかへり。此中持盡ひを在すの近隣に
住ゆる松とて小町と云ふ。女
四人ある。一は母の娘。小町と云はれて
ニツキテも居る。小町と云ふのはちばん

めくらとせの娘とすらも
おれへはもすよみこ又二人を小町とさん
おおきも海原と又其事奉とせりい良寛
おおきも海原と行とも被の上と被多くし
て行まむあらえり一も上皆未女もて國
まよひ女のみと山根極なり

附言

平水戸のまへとよあへりしに小野高尾
とよつ村アリトニ村老のせり黄葉重櫻
とゆき秋海棠を植けせりぞトニ小野
高尾の向に細川アラ移す源氏しとく
に五種もくきて布施を乞ふハある日源
やとて室の間に聞ひ候ふにまつた大主
皆もともと龍虎の如きをすすめのけつ
うを出でるわざをうきりて西風の聲を
うきりて春散礼持セハ宝鏡は時言ノ儀

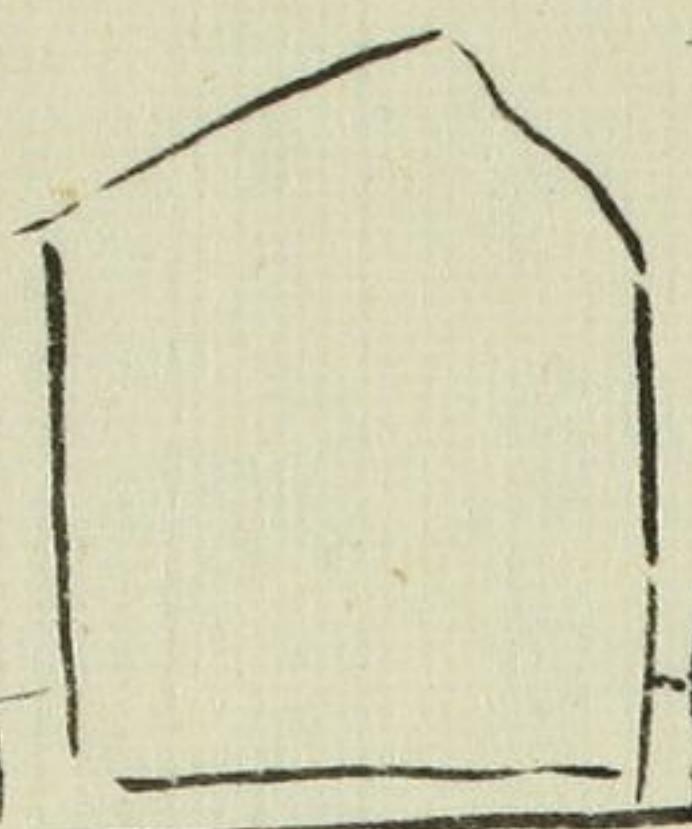
あらひの多納屋のうひまのまゝ曰

此里人の多くに住官とある女はつ物神社主
院にて曰かまくら小野のふ所うち魂をうち
もと銀糸椎作の庭はあり下音も彼の傍
よちりとして老子と云ふをしらひへ
と村のさすにゆくへる庭て差美子せあり
一村の名語に家母はおもと直角より思
て移と経とせてよき法を拂ふに小町
刀塔とてあり

長天寺

圓面古之代毛

表面文字見エヌ裏面國多カ
娘小町ト書附テ有リ



横一尺半

四角一丈四弓三間よつた又の字高納傳

も又の御社やまた度の宇院よりて安
心の御持つて住官傳教ノ事無事
此意も多と見えに處子と傳承

仍ひ不候と建海事へひまむ家裡法事。

高連船をあつて手へくやつめの支度い
今に少所立庵の間に草庵を移し庵の名
詠の東女の女をもとへ是人今とし
仰て水戸の東庵にて黄の卿に訴へま
るも又解を建海事へも申思候され
四小町東女の後室へとお叶へ



